京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を

株式会社　京都建築事務所
代表取締役社長　細見 建司

〒604-8083
京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地
TEL:075-211-7277
FAX:075-211-7270
http://www.kyoto-archi.co.jp/

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

大阪 SACHICO を守る署名にご協力を！
#Save SACHICO

今号で紹介している「性暴力救援センター・大阪 SACHICO」について、存続と体制強化を求める全国署名にとりくんでいます。性暴力や性被害は減少するどころか、子ども・若者、男性、LGBTQ もふくめて被害や困難はより多様化しています。そこで求められる支援の専門性はきわめて高く、SACHICO が担う役割は非常に大きいものです。ぜひ下記署名にご協力ください。

****

※電子署名の提出期限は2024年11月30日までです。→ Google フォーム

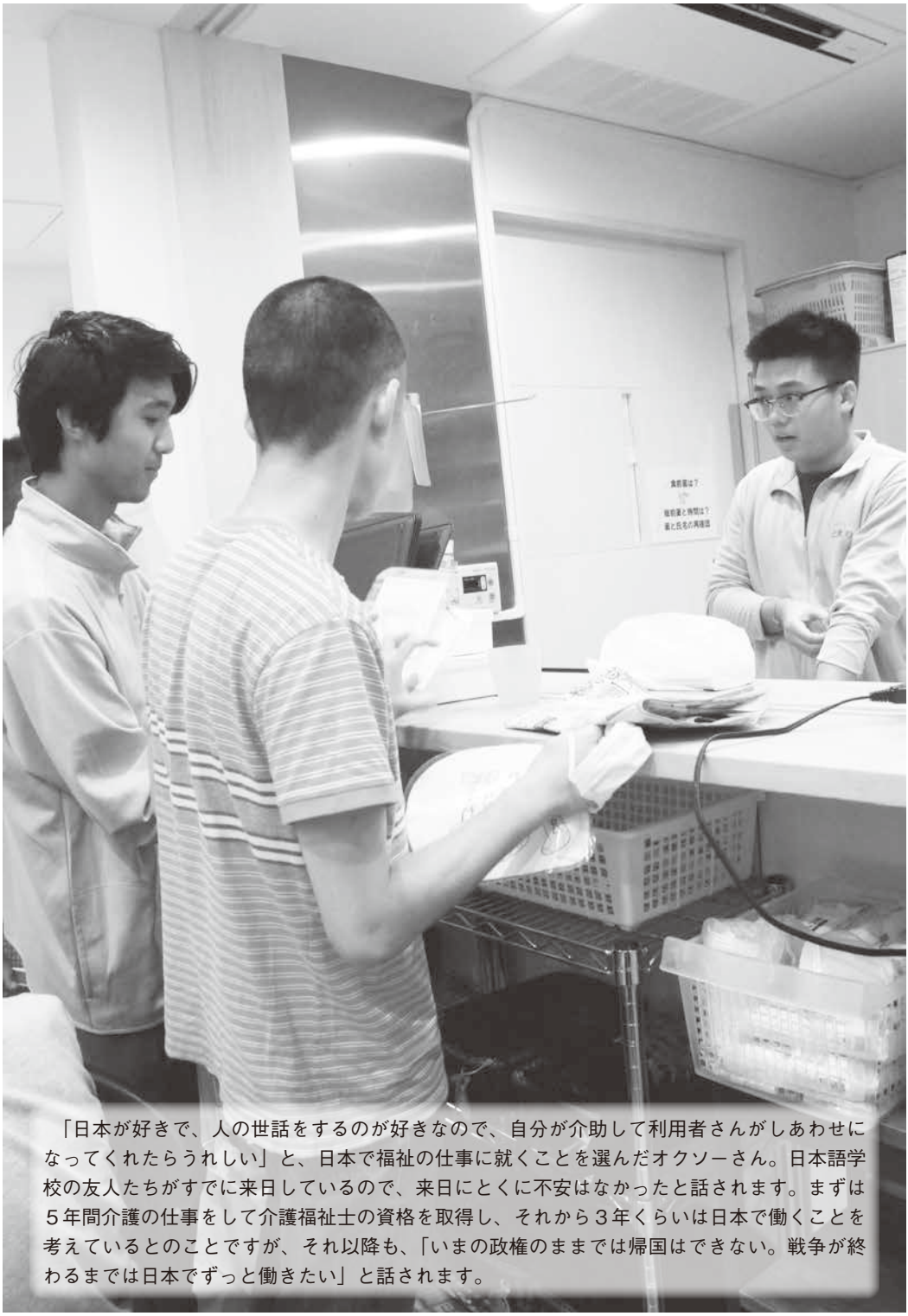
呼びかけ

「性暴力救援センター・大阪 SACHICO の存続と発展を願う会」

ミャンマーから障害福祉の世界へ

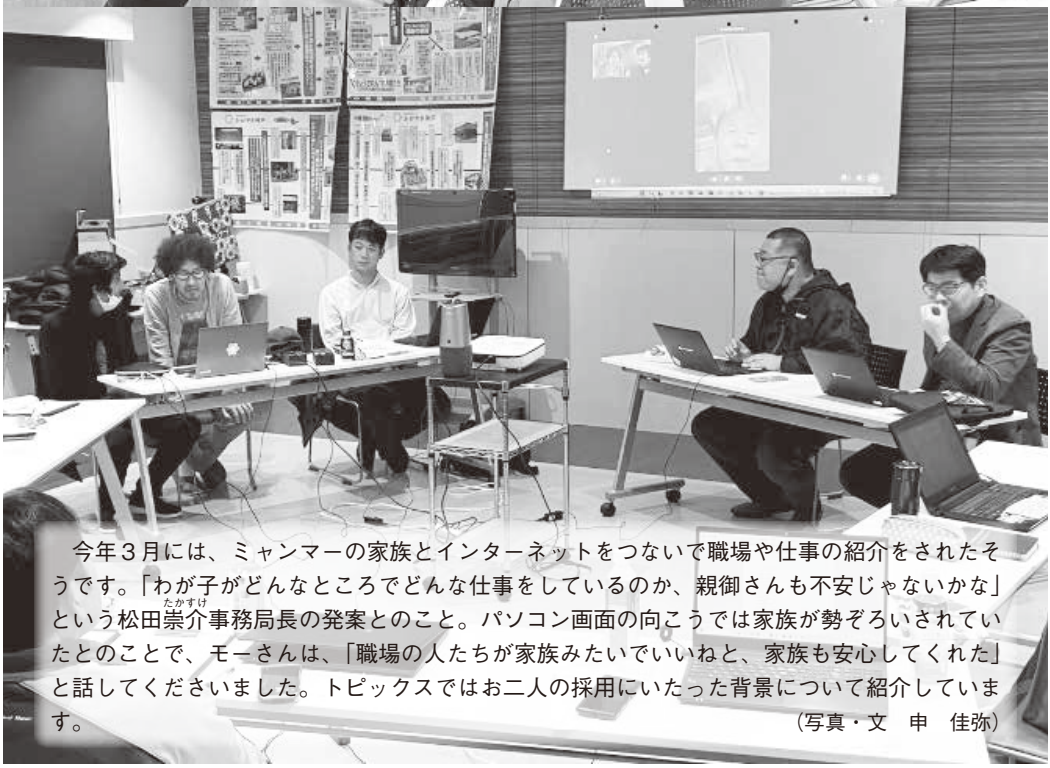
ミャンマー出身のオクソーカインさん（通称オクソーさん・24歳・写真）とルインモーアウンさん（通称モーさん・26歳・３ページ写真）は、2023年４月に特定技能実習生として社会福祉法人かがやき神戸に就職し、12月19日に来日しました。生活の準備や研修などを経て、年明けの１月からショートステイとまり木で仕事をしています。

ミャンマーでは、2021年２月１日に発生した軍によるクーデター以降、軍が権力を握り、３年以上が経過したいまも、民主化運動への抑圧や市民への攻撃・弾圧がつづいています。経済は停滞し、商店が閉まり、仕事を失った人も多く、オクソーさんとモーさんも、親きょうだいなどミャンマーの家族を養うために来日しました。



「日本が好きで、人の世話をするのが好きなので、自分が介助して利用者さんがしあわせになってくれたらうれしい」と、日本で福祉の仕事に就くことを選んだオクソーさん。日本語学校の友人たちがすでに来日しているので、来日にとくに不安はなかったと話されます。まずは５年間介護の仕事をして介護福祉士の資格を取得し、それから３年くらいは日本で働くことを考えているとのことですが、それ以降も、「いまの政権のままでは帰国はできない。戦争が終わるまでは日本でずっと働きたい」と話されます。

「ワンピース、ナルト、呪術廻戦などの日本のアニメが大好き」というモーさん（左）。「海外に行くのも飛行機に乗るのもはじめてで、来日してすぐに働くこともとても緊張したけれど、楽しみな気持ちのほうが大きかった」と話されます。「ひとり暮らし（オクソーさんとのルームシェア）はたいへんだけど、困ったときも職場の人が助けてくれるので不安はない」とのこと。いつか自分の両親も介助できるようにと、福祉の仕事で来日することを選んだと話してくださいました。



今年３月には、ミャンマーの家族とインターネットをつないで職場や仕事の紹介をされたそうです。「わが子がどんなところでどんな仕事をしているのか、親御さんも不安じゃないかな」という松田崇介（たかすけ）事務局長の発案とのこと。パソコン画面の向こうでは家族が勢ぞろいされていたとのことで、モーさんは、「職場の人たちが家族みたいでいいねと、家族も安心してくれた」と話してくださいました。トピックスではお二人の採用にいたった背景について紹介しています。

（写真・文　申　佳弥）

福祉のひろば
2024年11月号

【ひろばトーク】
ケアという人間力のある社会へ　川口　啓子　6

●特集●　日常を失わず、平和のうちに生きる
～第29回社会福祉研究交流集会in関東～

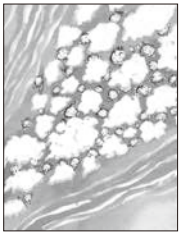
〈シンポジウム〉「公共」の縮小で、尊厳のある日常生活が守られるのか　河﨑　隆利　12
〈記念講演〉日本国憲法と公務労働の今日的役割
――晴山一穂さんのおはなし　藤原　民人　20
福祉現場で起きる虐待の実態とその要因、打開の方向を考える　松下かほる　24
全世代にわたる貧困と格差の拡がり　竹内　賢人　26
地域づくり、地域組織化の基本を考える　中井貴美恵　28
福祉の仕事の魅力と担い手不足　安部　徹　30
若手職員交流企画「福祉の仕事　作戦会議！」　阿部　孝志　32
参加者の感想　34

●トピックス●
もっとグラビア
福祉現場も外国人労働者も支え合えるあり方を模索しながら　38
性暴力救援センター・大阪SACHICOの活動と意義　生魚かおり　40
石倉理事長に聞く！　「骨太方針2024」ってなんですか？　44

●連載●
なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場
三人の息子たちのそれぞれの自律と暮らし　森　恒子　52
続・ヘルパー歳時記
ほんとうに困っていることはなんだろう②　56
WORK WORK――わくワク――　ひのき工房　60
こだわりの詰まったお菓子をお届けします！
JOB&ACTION　全国福祉保育労働組合（44）　62
福祉保育労ジェンダー平等宣言　～みんなのじんけん　まもれるように～
私の履歴書　社会福祉経営全国会議（44）
太陽と風と大地の中で大きく、もっと大きく！　村井　義幸　64
阿修羅がゆく　わたしが好きな釜ヶ崎（64）　水野阿修羅　66
育つ風景　地域の中に保育園があるということの意味　清水　玲子　68
映画案内　『墓石と決闘』　吉村　英夫　70
現代の貧困を訪ねて　生田　武志　72
沖縄の貧困地域と戦争跡を訪ねる（その1）
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
チャーミングな投げヤリじゃ！　ラッキー植松　74
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
花咲け！　男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　50／福祉の動き　78／今月の本棚　81
●グラビア●　ミャンマーから障害福祉の世界へ

●表紙の絵●
神門やす子



ひろば トーク

ケアという人間力のある社会へ

大阪健康福祉短期大学名誉教授　川口　啓子

超高齢社会を契機に、ケアという人間力のある社会をめざせないでしょうか。

人類の歴史は助け合いの歴史でもあります。「ヒト」という動物は、ほかの動物と異なり、未熟な状態で産まれます。それでも七〇〇万年という歴史的時間を生き延びてきました。そこには、人が人を護（まも）るために人に手を差し伸べる、ケアという人間力が常に存在したのではないでしょうか。

人類は、単独ではきわめて弱い動物でありながら、共同体をつくり子孫を繁栄させ、原始共産制、奴隷制、封建制という社会を経て、資本主義社会に至ります。しかも、長い歴史的時間をかけて、不完全ながらも弱者を受け入れる社会的な救済制度をつくってきました。今日では、民主主義と基本的人権を携え、平和の礎（いしずえ）とともに社会保障制度を築き、その普遍的価値と内実を世界中にいきわたらせようとしています。

きたる二〇七〇年、日本の高齢化率は約四割に達します。元気な高齢者もいますが、介護を要する人も増えるでしょう。階段の上り下りは不自由です。横断歩道もゆっくりです。突然転ぶかもしれません。家事にも整容（せいよう）（身だしなみを整えること）にも介助が要ります。杖をついたり、迷子になったり、息切れして座り込んだり……。こうした高齢者を多数抱える社会には、人が人を護るために人に手を差し伸べるケアという人間力がどうしても必要になります。その状況を無視すれば、介護難民があふれ生きづらい社会になるでしょう。

「量から質への転換」という言葉があります。では、生きづらい社会の質的転換を図

かわぐち　けいこ

1957年生まれ。無事に老い、健康に死にたいと思う67歳。『職場づくりと民主主義－仕組み・会議・事務』（2013年、文理閣）、『あなたの介護は誰がする？介護職員が育つ社会を』（2024年、クリエイツかもがわ）を出版。今は、職場づくりや職員育成について、医療福祉生協などにかかわっています。

る量的基盤とは何でしょうか。それは多数の高齢者です。高齢者だけでなく、生きづらさを抱える多くの老若男女が資本主義社会の強いる競争や効率性に抗（あらが）い、ケアという人間力に出会い、知り・学び、身につけるなら、ケアという人間力のある社会へと質的転換を遂げられるのではないでしょうか。

質的転換においてとりわけ重視したいのは、人権意識のアップデートです（くわしくは、拙著『あなたの介護は誰がする？　介護職員が育つ社会を』をお読みください）。人権意識のアップデートにおいては、まずは高齢者がよく言う「要介護になると迷惑だから……」という言葉を見逃さないことです。

要介護者は中途障害者です。ふだん障害者を迷惑とは言わない人でも、自分のことになると、「要介護になると迷惑だから……」と言ってしまいます。まるで美徳のように。このアンコンシャスバイアスを突破することからはじめませんか。

私たちは、「他人様に迷惑をかけてはいけません」と育てられました。この行き過ぎが今、ケアを求めることを迷惑の範疇（はんちゅう）に入れています。超高齢社会を機に、美徳のレベルにとどまる人権意識を耕（たがや）し、アップデートしたいのです。要介護を迷惑と言わず・言わせず、個々の生き方が権利となるよう、人間力を芽吹かせる時代を創りましょう。

人を「ヒト」に終わらせず、ケアという人間力の本源的蓄積を以（もっ）て、人間社会の本史がはじまります。

特集

ゆたかな福祉実践の積み重ねが平和を創る

一〇月一日、イランがイスラエルに一八〇発以上のミサイルを発射しました。近代的なビルが立ち並ぶまちに次々と着弾するミサイルと爆音の映像に、テレビから目が離せませんでした。イランの大統領は記者会見で、「自分たちは戦争を求めていない、攻撃をさせたのはイスラエルだ」と正当性を主張し、イスラエルの首相は「代償を払うことになるだろう」と報復を宣言しています。イランとイスラエルのあいだには何十年にもわたる歴史的・宗教的な軋れきがあり、どちらがより悪かと判断することは私にはむずかしいです。ですが、こうした戦争・戦闘にいたる根底には共通して、欠乏や恐怖、さまざまなかたちでの暴力など、人権が侵害される状況があり、そうした人権侵害の積み重ねの行き着く先が戦争なのではないかと感じます。

本誌二〇二三年八月号のトーク「平和を創る紛争解決学・平和学」で、筆者の高部優子さんは、「平和」とは戦争がないだけでなく、あらゆる暴力がないことと同時に、平和を創る行動やしくみがあることだ、と書かれています。まさに、日々の福祉実践そのものではないでしょうか。目の前の子ども、障害のある人、お年寄りの願いや要求、困りごとに耳をかたむけ、どうすれば目の前の人のゆたかな成長や暮らしを

実現できるのか、そのための福祉実践とはどんなものか、人権を守り尊重した実践ができているか、人権を侵害していないか……社会福祉にたずさわる者は、つねにそのことを考えていますし、考えなければならない仕事です。

「日常を失わず、平和のうちに生きる」をテーマとした第二九回社会福祉研究交流集会を通しても、ゆたかな福祉実践を守ることが平和を守ることにつながると、あらためて感じました。「人権」は条件付きで守られるものではありません。お金があるから守られたり、お金がなかったら侵害されても仕方がない、ということではありません。人手が足りないから侵害されても仕方がない、ということでもありません。この世に生まれたすべての人の人権は平等に守られなければならず、そこになにか〝条件〟があってはいけないのです。そのために公的責任が不可欠であり、どちらを選ぶか、なにを優先するかと〝条件〟をつける必要のないゆたかな職員体制が必要です。そうした福祉実践が守られず、人権を守ることに条件をつけたり、それを「仕方がない」と納得してしまうことの積み重ねが、虐待や暴力につながり、最終的には、「相手が悪いから武力攻撃も仕方がない」という戦争の論理に近づいていってしまうのではないでしょうか。

日本社会のなかでも、人権が守られることに対して条件をつけることに疑問をもたない状況が、少しずつ広がっているように感じます。そうしたなかで、日常の福祉実践に向き合い、守り、もっとゆたかな実践がしたいと求めていくこと、地域やさまざまな人と共同しながらその価値観を広げていくことが、まさに平和を創っていく実践そのものなのだと思います。

（編集主任　申）